# イギリスのクリスマスを楽しむ――祈りと笑いの祝祭都市にて

佐久間 康夫

## 聖夜を迎えて

『メサイア』では救世主の到来が高らかに歌われます。イエスの誕生を記念するクリスマスまでの4週間は、救い主の降臨を待ち望むアドベント（待降節）という期間です。イギリスの街の景色は一変、彩りを増します。厳しい冬の訪れにもかかわらず、気分の浮き立つ季節です。アドベントの楽しみは友人たちとのクリスマス・カードのやりとり。届いたカードで壁を飾り立てたものです。グリーティングをデータで送信する時代になって、そんな風習もすたれていくとしたら、ちょっと寂しいですね。

我が家もクリスマス・カードを壁に飾って

本物のツリーを買ってきて、室内をクリスマス仕様に仕立てるのはこの時期の大仕事です。友人宅を訪ねて、趣向を凝らした自慢のツリーを見せてもらうのは心躍るひとときです。ツリーは年を越して、1月6日の十二夜（顕現祭）まで飾っておきます。イギリスではクリスマス当日はもちろんのこと、日曜日も基本的に劇場やホールはお休みですが、休館日に居合わせた場合には、教会へ出かけてみてはいかがでしょう。巨大な伽藍の大聖堂であれ、小ぶりな教区の教会であれ、聖歌隊による音楽礼拝が開催されますので。

立派なクリスマス・ツリーのある友人宅の居間

## コヴェント・ガーデンのにぎわい

『メサイア』はダブリンで1742年に初演された後、翌年ロンドンに所を移して、コヴェント・ガーデン劇場で上演されました。劇場の正式名称はシアター・ロイヤル・コヴェント・ガーデン。1732年に建てられてから、ヘンデルが自作のイタリア風オペラを上演していた本拠地です。国王から芝居を上演する勅許をえて、晴れてシアター・ロイヤルの称号を

名乗ることが許された劇場のひとつでした。ハレルヤの場面で臨席していた国王ジョージ2世が起立したという逸話の伝えられる劇場です。

コヴェント・ガーデンという印象的な地名は、女子修道院の庭（コンヴェント・ガーデン）の一角だったことに由来しますが、16世紀以降はベドフォード公爵の所領でした。ヘンデルが活躍した頃には、流行の最先端を行くコーヒー・ハウスやタヴァーン（居酒屋）が次々に開業し、作家や俳優や政治家が集う芸術文化の発信地となっていました。反面で、無頼漢や娼婦が横行する歓楽街は犯罪の温床でもあったそうです。

コヴェント・ガーデン・マーケット

ロンドンの目抜き通りリージェント・ストリートもクリスマスの装いに

コヴェント・ガーデン劇場は、数度の建て直しを経て、シアター・ロイヤルからロイヤル・オペラ・ハウスへと名を改め、今日ではオペラとバレエ専用の劇場として盛名をはせています。劇場に隣接する青果市場も、観光客でにぎわうショッピング・アーケードへと姿を変えました。周辺には40数軒もの劇場が林立し、ウェスト・エンドと呼ばれる一大劇場街が生まれました。ヘンデルの時代から今に至るも、芸術や娯楽の中心地であり続けています。

**クリスマス・パントマイムに大笑い**

イギリスの歳末を彩る出し物といえば「パントマイム」。これはおとぎ噺を題材にした芸能をさす用語で、無言劇のことではありません。すでにヘンデルの頃から人気を博していて、イギリス人の歳時記にしっかりと根づいています。演目はおなじみの題材で、『シンデレラ』『白雪姫』『眠りの森の美女』などがよくかかります。

主人公には人気者の女優が配役され、敵役はむくつけき男優が女装して演じます。嫌われ役が登場すると、もうそれだけでブーイングの嵐。当の役者も観客席に向かって、悔しそうに舌を出したりします。子ども向けかと思いきや、意外にも年配客の比率が高く、みな童心に返り大声ではしゃいでいます。控えめな印象の強いイギリス人に、こんな一面があったなんて！

特に観客の参加を誘う演出が見もので、舞台からの呼び水に客席はすぐに応答します。場の雰囲気を伝えるのは難しいのですが、例えば、ある憎まれ役が「やったよ〜」（Yes, I did.）とウソをつくと、観客は「やってないよ〜」（No, you didn't.）と声をそろえ否定します。また「だれもいないよ〜」（No, there isn't.）というせりふには、「いるよ〜」（Yes, there is.）とやり返します。こうした他愛ないやりとりが繰り返されるたび、場内の興奮はうなぎ登りに高まっていきます。舞台から投げ込まれるお菓子に子どもたちは大喜び、有名な歌が流れれば全員で大合唱です。

かつてロンドン交響楽団のニュー・イヤー・コンサートに出かけた時のこと。ある曲の途中でオーケストラの団員が雪玉に見立てたボールを、いきなり客席に投げ込み始めました。熱狂にかられた聴衆もステージに投げ返して、ホールはさながら雪合戦の様相に。芸術を心から楽しむのに何の遠慮がいるものかと、クラシックの音楽会がまるでパントマイム会場へと変貌していました。

小学校ではイエスの誕生など聖書の物語を舞台化した「降誕劇」が、子どもたちによって上演されます。さすが劇作家シェイクスピアを生んだ国だけに、芝居心が豊かで、子どもとは思えない演技力にうならされることもしばしばです。

救世主の生誕を祝うことに加えて、私たちがこの世に生を受けたことに感謝し、人生を謳歌できる幸せを享受する季節、それがイギリスのクリスマスなのです。

（さくま やすお・イギリス演劇）

小学校で上演されたキリスト降誕劇の一幕

写真提供：筆者